

高山博

エール大学博士課程の最後の一年をケンブリッジ大学の visiting scholar としてイギリスで過ごすことになり、今年の六月からロンドンに住み始めました。従って、この『エール通信、2』はニュー・ヘイブンからではなく、ロンドンからということになります。海外生活も六年目に入り、留学当初の過敏な感受性は薄らいでしまいましたが、そのぶん落ち着いて自分自身の置かれている状況を見ることができるようになりました。今回は、前号で予告しましたように、私がアメリカ留学中に会った問題や考えるに至った事柄を紹介したいと思います。

渡米後の最大の問題は簡単に言えばカルチャー・ショックと言葉の不自由さということになるでしょう。この障害を軽減するために早めに渡米することができればよかったのですが、奨学金申請の結果が遅れたために新学期直前の渡米となり、授業の苛酷な負担とこれらの問題を同時に処理しなければならなくなりました。アメリカの大学院で歴史学の PhD を取得しようとする人は多かれ少なかれ同じような体験をするだろうと思われますので、まず、私の最初の一年がどういう状況だったか、秋学期と春学期に分けて具体的に紹介していきましょう。

1. 秋学期

アメリカの大学の新学期は九月に始まります。大学によっては秋学期、冬学期、春学期、夏学期の4学期制(quarter)を取っているところもありますが、エール大学の場合は、秋学期と春学期の2学期制(semester)で、秋学期が九月から一月まで続きます。九月始めの入学式および一般的な事務手続きが済むとすぐ授業が始まりました。最初の

二週間はショッピング期間といって、学生達は色々な授業に出席しながら今学期登録するクラスを探しますが、指導教官の助言を受けて自分が取りたいクラスが決まったら、登録用紙に記入してDGS (Director of Graduate Studies)のサインをもらい、事務室に提出します。

私は、最初の学期、ミスキミン (H. Miskimin) 先生による『Topics in the History of Europe』という題目のセミナー、ボズウェル (J. Boswell) 先生とステイシー (R. Stacey) 先生による『Europe 800-1300』という題目の個人授業 (Directed Reading Course)、トットマン (C. Totman) 先生による『Great Peace: Japan 1600-1868』という日本史のクラスを取ることにしました。

ミスキミン先生のセミナーは学生が17人で、学期の前半は1時間50分の授業の最初から最後まで議論でした。一週ごとに次回の宿題となる本や論文を羅列した一覧表を渡されますので、授業の題材が何であるのかはわかっていたのですが、学生達が何を議論しているのかはしばらく全く分かりませんでした。

ボズウェル先生とステイシー先生による個人授業は、私とマイケルという同期の学生 (といっても69才のおじいさんですが) のために特別に開いてくれたクラスで、一週間交代で授業を持ってくれました。両先生ともゆっくりしゃべってくれるのですが、質問の意味が分からなくて惨めな気分になることがしばしばありました。一番つらいのは宿題となっている本のコメントを聞かれるときです。たとえ一度目を通していても、深く理解している訳ではありませんので、なかなかうまく答えることができません。しかし、学生は二人だけですのでこちらが何も考えてこなければ授業はほとんど進まないのです。

この二つに比べてトットマン先生の日本史はずっと楽でした。日本史の知識がありま、るので言葉のハンディキャップをかなりカバーできるようです。でも、議論に参加できたわけではなく、ただ、どういうことが問題になっているかが推測できたにすぎません。

アメリカの学生は、よくサバイブ (survive) という言葉を使いますが、これは本当に

大学あるいは大学院生活にぴったりの言葉です。前回紹介しましたように、三つのクラスを合わせると一週間あたり千頁前後の読書を要求されますので殆ど毎日勉強することになります。授業時間や課題図書を探す時間を考えると、だいたい一日に二百ないし二百五十頁程度の本を一冊読み終えなければなりません。これはアメリカ人の学生にとってもかなりの負担で、ちょっと怠けるとすぐ授業に追い付かなくなってしまいます。従って図書館は週末を除いていつも12時（あるいは1時）の閉館時まで込み合っています。

私の場合は、食事と授業時間以外はすべて勉強にあて、冬休みが来るまで休みの日を持つことはできませんでした。アメリカ人と比べて大きな英語のハンディキャップがあるわけですから、彼らが休んでいる間も勉強することになります。それでも、二つの授業をカバーするのがやっとで結局トットマン先生の日本史の授業が犠牲になりました。

十月半ばにフランス語の試験を受けました。歴史学部が PhD candidate になるために要求する点数は600（TOEFLと同じしくみで偏差値に近いものです）とかなり高いのですが、この点数には全く届かず落ちてしまいました。受験勉強が全くできなかったのも一つの理由ですが、それ以上に英語のせいでもありました。まず、試験官が最初に時間は60分間だといって途中で40分に変更したのですが、その変更を聞きそびれたということ。また、注でいくつかのフランス語の単語の説明がしてあるけれども、その英語が分からず注の役割を果たしてくれなかったということです。結局、再受験しなければならないのですが、わたしの場合は西欧中世史専攻ですので、PhD candidate になるために、このフランス語以外にイタリア語とラテン語の試験に合格しなければなりません。一年目に少なくとも一つは合格しないと退学となりますので、毎日の忙しさを考えると全く憂鬱になりました。

しかし、二週間後にスキミン先生のクラスの口頭発表を控え、試験終了後すぐにその準備を始めました。宿題をこなしながら、それとは別に、学期末に提出するリサーチペーパーのための口頭発表をするというのは常識的には不可能なのですが、ここでは常

に不可能だと思われることが要求されます。私たち留学生の場合は特に言葉のハンディキャップが重なって絶望的な気分になります。

私はリサーチ・ペーパーの題目に『フィリップ美麗王治世期の地方行政制度』を選びました。最初、日本である程度勉強していたシチリアに関するテーマを選ばせてくれるよう頼んだのですが、授業との関連性が薄いために受け入れてもらえず、仕方なく選んだのです。フランス語の試験の前に集めていた文献、史料が自分の部屋の本棚二列余りを占めていましたが、どう考えてもこれらを二週間以内に読み上げて研究論文を書くのは不可能に思えました。でも、投げるわけにはいかないのでこのテーマに関して最も信頼できると思われる研究者ストレイヤー (J. Strayer) の最新刊『The Reign of Philip the Fair』(Princeton, 1980, 450p.)を中心に勉強を始めました。

この二週間は私にとって全く異常な体験でした。宿題の本を読んでいると時間が瞬く間に過ぎてしまってこの口頭発表のための時間が取れないし、この勉強を始めても知らないことばかりで問題がなかなか見えてこないのです。期日は迫ってくるし、逃げ出すことはできないし、夜は不安でほとんど眠れませんでした。唯一不安を消すことができるのは、関連する文献を読んでいるときだけです。数時間の睡眠と食事時間を除いてひたすら読み続けました。二週間で大型ファイル一冊分のノートができあがりました(これを合わせて二箇月足らずの間にノートは大型ファイル四冊になっていました)。不思議なことに不可能なことが可能になるようです。十日間ひたすら読み続けていると一つの問題を見つけることができました。この問題に合わせて材料を集め、口頭発表の前日までにノート11枚にまとめあげました。

口頭発表は非常にうまくいきました。私の発表は30分でその後質疑応答が30分続きましたが、学生達は良く理解してくれましたし、ミスキミン先生は授業の後に『A good Job!』とって下さいました。この発表の後、これまで全く無視していた学生達が挨拶してくれたり話しかけてくれるようになり、やっとならぶ一員として認められたよう

です。

十一月初旬にこの最初の関門を乗り越えたわけですが、その後一日も休む暇はありませんでした。トットマン先生の日本史のクラスでの口頭発表とターム・ペーパーの提出の締め切りが重なっていましたし、ミスキミン先生のリサーチ・ペーパーの締め切りは一月十五日と決まっていたからです。宿題をこなしながらトットマン先生のクラスの口頭発表を終え、なんとか論文も締め切り日に提出してやっと冬休みに倒れ込みました。

この間嫌なことも色々ありましたが、とにかくかろうじて生き延びることができたというのが実感でした。食べなければ体が持たないということが分かっていたので寮の食事は毎回アメリカ人の二倍近く食べていました。そのおかげで、風邪もひかずに済み、太ることもありませんでした。

冬休みをミスキミン先生のリサーチ・ペーパー執筆に当て、ぎりぎり締め切りの一月十五日に提出することができました。そして一月十六日から春学期が始まりました。ボズウェル先生とステイシー先生の個人指導で論文提出を要求されませんでしたのでかろうじてすべてを終えることができましたが、もし残した場合、次の学期にその分余計に負担がかかることとなります。そして、容易に想像できるのですが、提出できなかつたら退学ということになります。

2. 春学期

春学期はボズウェル先生の『Law and Society in Medieval Europe』、ステイシー先生の『The Sources of English Medieval History』、トットマン先生の『The Melji Restoration』を選択しました。やはり、宿題が多くこの学期も殆ど毎日朝から晩まで図書館か自分の部屋で過ごしました。春休みに一度ニューヨークへ行きましたが、この学期中一日の休みが取れたのはその時だけでした。ただ、前学期と違って授業の要領がわかっていたし、いくらか英語もわかるようになっていましたので絶望的な気分

は陥らずに済みました。

この学期はとにかく授業で発言することを心掛けたのですが、これはやはり大変でした。三つのクラスのなかで一番やりやすかったのはトットマン先生の『明治維新』です。なんといってもアメリカの学生と比べて格段に多くの知識を持っているわけですから多少の言葉のハンディキャップは自信で補うことができます。時々議論をリードすることができました。

しかし、他の二つのクラスはそう簡単にいきませんでした。両方とも史料を中心とした内容で、毎日の授業は宿題を読んできたということを前提に進められ、宿題として出されていた文献に関する質問あるいは概要、感想等を求められることから始まります。そして質問に対する解答を議論するという形で進められます。先生は大抵最後に自らの意見を述べてくれますが、授業の途中では簡単な寸評を与えたり混乱した議論の整理をするくらいであまり発言しません。従って、学生達が何を問題にして何を議論しているのかがわからなければ、いくら宿題を完全にこなしてきても何も発言できないことになるのです。この二つのクラスのうちステイシー先生の方は、テーマがかなり限定されていたので、途中から少しずつ発言できるようになりました。しかし、ボズウェル先生の方は、学期の最後によく何か喋れるようになったという感じです。毎週毎週宿題と予習は完全にやって、どういう質問をするかまでちゃんとノートに書いて万全を期して授業に出るのですが、それでもどうしても議論に加われず、『今回も駄目だったなあ。この次は絶対に！』と思うことの繰り返しでした。

授業での発言はこういう状況でも、秋学期に比べれば精神的にずっと楽だったと言えるでしょう。宿題となった本や論文について、前学期はただただ読書に追われて何が頭に残っているのか分からない状態だったのに対し、それぞれについて自分なりにある程度の説明やコメントを加えることができるようになったからです。

学期末に提出するリサーチ・ペーパー、ターム・ペーパーはやはり大きな負担でした。

アメリカ人は授業期間中も準備をしているようですが、私たちにはとてもそんな芸当はできません。トットマン先生のクラスのためのターム・ペーパーの締め切りは五月十日、ボズウェル先生のリサーチ・ペーパーとステイシー先生のターム・ペーパーの締め切りは両方とも六月一日と決められました。幸い三月に二週間の春休みがありましたので、それをすべてトットマン先生のターム・ペーパーの作成に当てました。春学期の授業はだいたい四月いっぱい終わりますので、そのあと残り二つの論文を仕上げる予定にしたのです。幸い、ボズウェル先生はシチリアのテーマで書くことを許可してくださいましたので、日本で勉強していたことをもとに一つ論文を書き上げることができました。

しかし、結局この論文作成に一箇月かかり、ステイシー先生に論文提出締め切りの延長を申し込む羽目になりました。この時点で私のこのクラスに対する成績は不完全ということになり、成績表には『Incomplete』という印が付きしました。次の締め切りは八月三十一日に決まりましたが、この期日までに提出できないと退学の問題が生じてきます。成績表に記された『Incomplete』は、論文提出後成績が記入された時点で『[]』に書き換えられ実質的意味を失いますが、この印は成績の横にいつまでも残り続けることとなります。

さて、この間、PhD candidate になるための要求事項である語学の試験にも合格しなければなりません。というのは、博士課程の学生は最初の一年目に少なくとも一つの語学試験に合格しなければならないという規定があるからです。フランス語の準備は全くできませんでしたので、ラテン語の試験を四月三十日に受けることにしました。ラテン語の試験は、フランス語の場合と違って、歴史学部主催の羅文英訳だけの試験です。出題された題材が読み慣れた中世ラテン語だったせいもあってこれは高成績で合格することができました。これでまた一つの関門突破です。博士課程学生の初年度に要求される成績の『優』の数も規定数を越えていましたので、あとはステイシー先生のターム・ペーパーを八月末までに提出し、これで『可』以上の成績をおさめれば一年目は生

き延びることができるわけです。

この論文を残したまま夏休みに入りましたが、夏休みの前半（六月、七月）は八月十日のフランス語試験の準備にあてました。試験のために特別に用意されたフランス語の授業に毎日出席し、十分な勉強をして受験することができましたので、今回は余裕をもって合格することができました。その後はステイシー先生のターム・ペーパーに集中し、これも無事に八月三十一日に提出することができました。

3. 日々の生活

以上が、私の留学一年目の生活の概要です。ほとんどが授業と勉強と論文執筆と試験で占められていますが、これらが私の頭を占めていたほとんどすべてだったような気がします。しかし、現実にはもちろん、これら以外の日常的な生活があり、人々との接触のなかで様々な障害や問題を体験することにもなります。

小さいことでは、日常生活に必要なものがどこに行けば手に入るかがわからないといった類のことから、サンドイッチを注文して『パンの種類は？』と聞かれて往生したこと、レストランで注文した後『Here or to go?』といわれなんのことか分からなかったこと、コンピューター・センターに登録に行って英語が分かる人を連れてきなさいと冷たくあしらわれたことなど数え上げればきりがありません。

しかし、一番つらかったのは、しばらくクラスメイト達から無視され続けたことでした。言葉がなかなか通じないので話するのが面倒だという気持ちはわからないでもないのですが、こちらが挨拶して露骨に無視されたときは二・三日陰鬱な日が続いたものです。日本史の授業に出ている学生達はまだ日本に関心があるからいいのですが、西洋中世史の授業となるといったいこいつここで何をしているんだろうというような顔をされました。数人の親しい友人ができた今から考えるとじつに不思議なのですが、当時は毎授業がとても居心地が悪かったのを覚えています。

こういう他人に対する冷淡さや無関心はその後もたびたび味わいましたが、激しい競争社会の中にあってはある意味では仕方のない態度なのかも知れません。全員が卒業できるわけではなく、常に自分が落後者になる可能性を持った状況の中では他人に対する気配りよりも自分を律することの方が重要なのでしょう。誤解のないように書きますが、これは私のエールの学生に対する一般的な印象であって、個人レベルでは親切な人優しい人を含めて様々な人達がいることはいうまでもありません。それは日本と同じです。

しかし、こういう人間関係の中で言葉が不自由であることは致命的です。「英米人は英語が話せなければ人間じゃないと考えている」という冗談がありますが、これはアメリカで言葉の不自由を感じている人の心情をじつに巧みに表現していると思います。英語がしゃべれなければ、日常生活で冷たく扱われるというのはよくあることですし、授業でも発言できなければ頭が悪いと見なされ、存在すら無視されることになりかねないのです。しばらくは同僚の自分に対する評価と自分自身の評価とのかい離に悩まされることになります。

これらの問題の大部分は言葉の障害に起因するものですから、個人差が大きいのはいうまでもありませんが、英語の準備を十分にしていなければ多かれ少なかれ留学する大部分の人が経験することになるでしょう。

4. 米国大学院留学のすすめ

今まで私が留学一年目に出会った問題を紹介してきましたが、こうした問題は滞在日数を重ねるに連れて軽減していきます。膨大な宿題の山に追われるのも最初の二年間だけですし、プレッシャーが続くのも三年目に口述試験に合格して PhD candidateの資格を取得するまでです。その後は自分のペースで論文を書き上げればよいのです。いずれにしろ一番大変なのは一年目ですから、最初の年を乗りきることが大切です。従って、一年目は決して無理なスケジュールを組んではいけません。指導教官と相談して、から

い点数をつける教授や性格的に厳しい教授のクラスは二年目に回すほうが無難と言えるでしょう。エール大学の場合是一年目の成績の平均が『良』以上、また、『優』の数が二つ以上でないと博士課程に不適格とみなされますので、一年目の成績はかなり注意しないとイケないのです。

三つのクラスのうち一つを日本関係のものにするのは賢明な方法だと思います。私たちにとってはいくら頑張っても一学期に二つのクラスの宿題をこなすのが限界ですので、一つ手を抜けるものがが必要です。リサーチ・ペーパー、ターム・ペーパーの有無にも注意を払う必要があります。一学期に二つのリサーチ・ペーパーが重なったり、三つの論文を提出することになったら、学期内の完成はほとんど不可能だということを覚えておいてください。

さて、いままで私がアメリカ留学の初年度に出会った問題や考えたことのいくつかを紹介してきました。この一年間は私にとっては非常に骨の折れる、二度と繰り返したくはない生活でした。でも、留学したことを決して後悔しているわけではありません。苦勞以上にはるかに多くの貴重なものを得ることができたと思っているからです。その中から私が日本にいれば決して手に入れることができなかつたと考えられる事柄を二つだけ紹介して今回の報告を終わることにします。

一つは私の専門領域である『西洋中世史』に関する整理された知識の体系を私なりに身に付けることができたということです。私がとったクラスのほとんどすべての授業が非常に効率的に組織されていて、一学期を終了した段階で、ある大きなテーマに関する現在の学会の状況、主な史料状況、問題点等が理解できるようになっていました。悪く言えば詰め込み教育で、また各教授の認識がかなり反映することにもなりますが、短期間に膨大な量の情報と道具類を手に入れることのできるメリットは、計り知れません。実際、一年目はほとんど専門知識のないアメリカの学生が、三年後には色々な問題でかなりの議論を展開できるようになるのですから驚きです。

アメリカでは、専門知識のない学生に必要な知識を身に付けさせるのは教授の義務だと考えられ、そのために教授がそのような授業を行なっているかどうか大学当局が授業内容をチェックする制度も確立しています。従って、教授達は常に授業を改良し、最新の情報を盛り込んでいくようなプレッシャーをうけることになります。一方、研究者としても、毎年一定以上の業績をあげることを要求されています。そして、業績・教育において無能だと判断されれば解雇されるわけですから、こうしたプレッシャーは相当大きなものだと考えられます。これに比べると、日本の現在の大学・大学院制度は、教育においても教授達の業績へのインセンティブにおいてもただ悲惨としかいいようがありません。

しかし、アメリカの制度にも問題がないわけではありません。三年間の詰め込みと厳しい競争を生き残った学生が研究者に適しているかどうかわからないからです。実際、PhD candidate になったあと論文を書き上げることのできない学生の多さが新聞、雑誌で話題になったこともあります。留学する場合も同じ問題が生じてくるわけですから、余り早い時期の博士課程留学は勧めることができません。日本で研究者としてやっていけるということを見極めたうえで、留学の手続きを始めるべきでしょう。修士論文を書き上げてできるだけ早くというのが最適だと思います。三十才を過ぎてからの PhD 学位取得は体力的に無理かも知れませんからできるだけ早いほうがいいと思うのです。

さて、私が、留学して手に入れることができたと考えているもうひとつは、自分の価値判断や思考を相対化させる新しい視点とそのための道具です。外国生活を続けていると自分が日本人であることを否応もなく認識させられます。自分の思考様式、価値観が回りの人達と違っているということは少し真面目な議論を始めればすぐわかることですし、相手が自分の後ろに日本のイメージを見たり、一般化した日本人像を押しつけられるのは旅行者でも容易に経験することでしょう。

留学していると常に自分をこういう状況の中に置くことになりますが、人間関係が密

になってくるとどうしてもお互いの間の考えの違いを意識させられますし誤解を解きたいと言う欲求が働きます。もちろん、人によっては、意図的に意見が衝突する話題をよけたり、所詮外国人には日本人はわからないと開き直って考えるのをやめる人もいますが、私の場合はこういう矛盾点や思考方法の違いに引きつけられてしまいました。時間が取れるようになってからは、ニューヨーク・タイムス、ウォールストリート・ジャーナル、エコノミスト、タイム、ニューズウィークを購読するようになりましたし、ABC, CBS, NBC, CNNのテレビニュースも意識して見るようになりました。そのおかげで少なくともアメリカのメディアをとおしたアメリカ人の考え方やアメリカ社会のプライオリティの置かれ方もわかってきました。そして、私にとって貴重なのは、それらと対比することによって自分の考え方が何を無意識の前提の上に構築され展開しているのかが見え始めたことです。

日本に比べれば、アメリカの学生達の政治・社会問題に対する関心は非常に高く、こちらが問題意識とある程度の知識を持っていれば、議論の話題に事欠くことはありません。価値観の衝突は何度も経験するはずですが、留学生のなかには、時間ができてもゴルフ場通いや旅行に精を出し、アメリカのテレビ、新聞、雑誌等になじむこともなく日本に帰っていく人達も多くいますが、残念なことです。皆さんには、私が留学して得たなかで一番貴重だと考える、こうした自分の価値観や思考様式を相対化する機会を逃しては欲しくないと思います。

この報告が、アメリカの歴史学 PhD取得に挑戦しようとしている人達に少しでも役に立てれば幸いです。